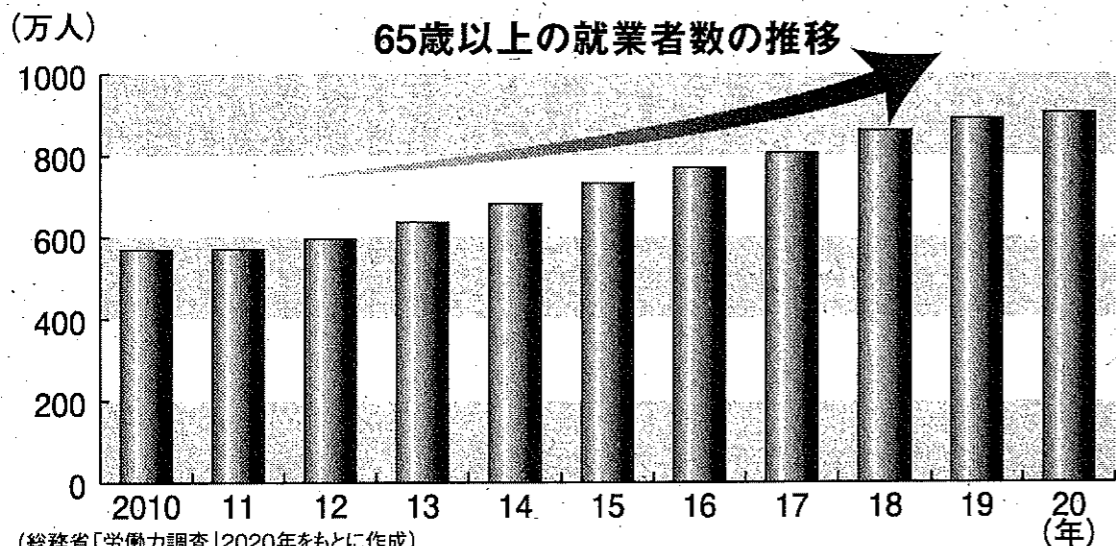


長く働いて



人と人、組織と組織を「つなく、

リエゾン、シニアが活躍



までの就業機会の確保が企業の「努力義務」となった。また、さらなる長寿化

も予想されることから、これからは65歳以降も働くのが当たり前になっていくだろう。もちろん、体力などを考え

と現役時代と同じ調子で働けるわけではない。働く目的も「稼ぎ」だけではなく、「会社に依存するのではなく、自分の選択でイキイキとしたキャリアを送る」「自走人生」を作ってほしいですね。こう話すのは、定年後研究所の池口武志所長だ。かねて50代以降は、それまでの「会社人生」からのモードチェンジが大切と説く。池口所長が続

「人の役に立つ！」

さまざまな社会課題の解決にシニアが大きな役割を果たす日がやってくるかもしれない。定年後の人生を社会貢献に捧げるシニアが増えているからだ。専門性がなくてもOK、豊かな人生経験を生かして人や組織をつないでいけば十分に役割が果たせるという。合言葉は「人の役に立つ！」だ。



「社会貢献人生」

社会課題の解決にシニア力を生かす!

「定年前後の会社員が、第二の人生で社会貢献の事業に関わることができるようになるため、彼、彼女らとさまざまなNPOをつなぐ仕組みを作りたいんです。65歳以降もチャレンジし続けたいと考えています」

こう話すのは、「日本NPOセンター」の事務局で働く本田恭助さん(64)だ。

と言ってもNPOの専門家ではない。日用品大手、花王の元社員で定年後、再雇用されてNPOに出向中なのだ。花王は定年後の再雇用希望者に社内外の配属可能先を紹介する説明会を開いている。本田さんは、「権限もないのに社内に残るのはイヤだ」と思っていたところに、説明会で出向先としてNPOがあるのを見つけて即断した。

「50代半ばから両親の介護の関係で、実家の地域

の皆さんに大変お世話になったので、定年後は人の役に立ちたいと漠然と考えていたんです」(本田さん)

ただし実際に仕事を始めるに挫折の連続だった。会社員時代の発想で話をすると、即座に「ここは企業ではありません」。1年余りは、ほとんど役に立たなかった。それでも現場で働く人たちと話している、社会貢献の大切さをひしひしと感じた。多くのNPOが苦しい決算業務などで効率的な手法を紹介すると、徐々に喜ばれるようになっていった。

「マネジメントの部分で『会社員』として身につけた知識や経験は絶対に役に立つと確信するようになりまし。それで全国に約5万あるNPOに、さまざまな社会課題を解決したいと考えている志のある『会社員』を送り出せるようにできればと

考えるようになったんです」(同)

大手企業に花王のような制度整備を働きかけた、人材会社に「仕掛け」を持ちかけたり……。現実には厳しく成功例はまだないが、めげずに続けるつもりだ。

本田さんが言う。

「会社員時代の最後の10年、花王社内のいろいろな組織を『つなぐ』仕事をしました。私は何の専門家でもありませんが、人と人、組織と組織をつなぐことぐらいはできます。今後は高齢者の『仕事』の面で、それをやっていこうと思っています」

「自走人生」の姿

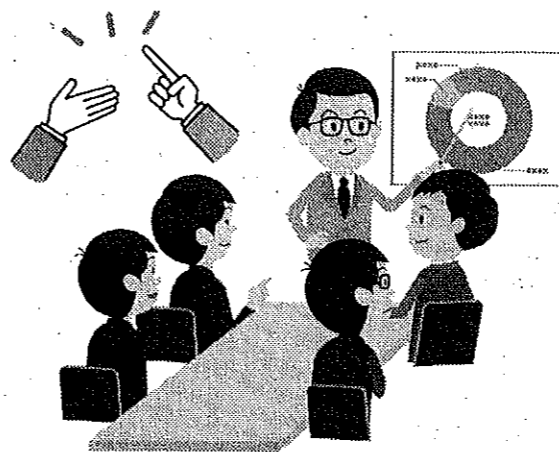
「定年後、どう生きるか」は古くて新しい問題だ。「60歳定年→65歳まで再雇用」が今の主流だが、法改正で昨年度から70歳

「スペシャリストでなくても、長年の経験を生かせる道はあります。その一つが、人や組織をつなげていく力です。連絡役の意味もあるフランス語をつけて、私は『リエゾン』シニア」と名付けました」

池口所長は、そんな「つなぐ」生き方をするシニア24人にインタビューして、今春、「定年NEXT」という本にまとめた。本田さんはじめさまざまな人の「自走人生」が描かれているが、一つの特徴として言えるのは「人の役に立つ」ことを働く動機にしている人が多いことだ。

54歳の役職定年に合わせて地域の販売会社に転職した。60歳以降は再雇用されて新入社員や部課長向けの研修を担当してきた。

「65歳で会社を辞めるときに考えたんです。会社のおかげで安定した生活を送れたが、最後の5年間、人材開発や社員教育の仕事ができたので、会社に恩返しできた気分になりました。それで、よし、これからは違う世界で社会に恩返ししたい



「新現役交流会」のイベント風景

と思ったんです」

退社時期に合わせて資格を取った。会社員時代は自分の経験談を話してきたが、「本物のキャリアアカウンセリングをするには、基本となる理論を身につけないとダメ」とわかったからだ。

実務経験がないので働き先を見つけての苦労したが、先輩コンサルタントに教えられた東京都の外郭団体で何とか職を得た。

仕事は「65歳以上の人を雇ってくれる企業を探して、職を求めると高年齢者とマッチングすること」だ。

「と言っても、仕事の8割は企業探しですね。65歳以上の求人を出している会社を見つけて連絡、アポを取って1日2社とか回っています」（高橋さん）

前述したように、法改正で70歳までの就業機会の確保が企業の「努力義務

務」になったが、実際の65歳以上の就職の現実は一層厳しい。

「現場が全然ついていない面があります。でも、雇ってくれる企業もありません。昨年度は私が面接に同行した35人のうち半数以上が採用していただけました」（同）

「人生の後半は他人のために」

都の外郭団体には72歳まで勤めることができる。高橋さんは、実務経験を積んで今後はどこでも通用するようなキャリアアカウンセラ―になりたいと早くも「生涯現役」の構えだ。

本田さんと高橋さんは、奇しくも「元氣な高齢者へ向けた仕事づくり」という同じ分野で社会への貢献をめざしている。本田さんは大企業などの組織に制度づくりを働きかけている。一方の高橋さん

は、地道に企業訪問を繰り返す日々だ。

「長く働く」が世の一大テーマになるにつれ、この分野に、まるで吸い寄せられるように人の役に立ちたいシニアが集まってくる。

大手広告会社、電通OBの「力廉さん(75)」は9年前、会社時代の先輩と同僚と一般社団法人「I K I G A I プロジェクト」を設立した。

「会社員時代は、やりたくても手の及ばない仕事がいっぱいあった。例えば、対中小企業や対地方自治体です。こうした団体から要望をヒアリングして、できる人を紹介していく。これは人材紹介の組織なんです」

登録しているのは同じく電通のOBたちだ。地方に関心のある人や専門性の強い人が多い。力廉さんによると、どんな仕事が増えていくわけではないが、登録者によっ

ては自治体から引っぱりだこになっている人もいるとのことだ。

この社団法人の中で、一力さん自身は社会貢献ができる仕事に関わり続けている。シリエンゾンの名にふさわしく、人をつなぐ仕事が多い。

「今は工務店が行っている取り組みを応援しています。東京の方に秩父で植樹をしてもらったり、森の中で自然観察会をしたりして都市部と秩父の森をつなぐことが仕事です」（一力さん）

社会と関わり続ける動機は、やはり人の役に立ちたいからだ。

「人生の前半期は、どうしても『自分のため』が中心になります。だから後半期の今は『他人のため』を中心に置いています」（同）

仕事がつまみいくコッは、いつの世も人脈とアイデアだろう。顔が広ければ、自分が「つなぐ」

の役に立つアドバイスがほしい中小企業と、専門分野で10年以上の経験を持つベテランシニアを、お見合い方式でマッチングさせる独自の交流会をたつた一人で作り上げた凄腕だ。

事業のベースには、中小企業を支援する意思のあるベテランシニアが案件を求めて登録する国の制度（「新現役」登録制度）がある。

金融機関と組み中小企業を支援

制度は古く2003年から始まったが、肝心の中小企業とのマッチングがなかなかうまくいかなかった。

保田さんは07年度から関わるようになり、すぐさま「本質」を見抜いた。「支援を必要としている中小企業をどう見つけるかが勝負なんです。中小企業のことをよく知っ

ていないと、そこはわかりません。そう、地域の金融機関で中小企業と付き合っている信用金庫や信用組合を味方にしようと思いついたんです」

しかも業界を調べると、生保の法人営業時代にカウンセラーだったお客さんが偶然にも信金中央組織の大幹部を務めていた。

「さっそく話を持ちかけて、意欲があつてチャレンジ精神にあふれた都内の信金理事長を何人も紹介してもらいました」（保田さん）

あとは、マッチングをどう工夫するかだ。参加する信金側にもメリットがあつたほうがいい。そこで理事長に頼んで「支店長案件」にしてもらい、支店長自らに企業を選んでもらった。

と信金支店長の2人が、応募してきた複数の「新現役」を面接するという、誰もやったことのない形式が採用された。もともと「面接」と言っても、社長と支店長、そして「新現役」の3者は対等だ。

金融機関を巻き込み、新しい面接方式を採用したマッチングは「新現役交流会」と名付けられ、年を追うにつれ実績を上げていった。5年前には有志で一般社団法人を立ち上げ、「ひとりぼっち」から脱却した。保田さんが言う。

「3千万人いる日本のシニアの数パーセントがこの事業に参加してくれたら、何百万社の中小企業が元気になる。また、この方式はアジア諸国でも通用すると考えており、海外展開も検討中です」

人の役に立ちたいという動機づけで、「元氣な高齢者へ向けた仕事づくり」の分野で気を吐くシニアたち。ここで紹介した4人は、シリエンゾンのシニアとして先の定年後研究所の池口所長の本に登場した人たちだ。その池口所長が言う。

「すべてが社会背景全体を見渡したものばかりではないと思います。結果的に今の社会課題の解決に彼らは大きく貢献していることになりました。ほかの社会課題についても、同様にシニアの力を生かせる可能性が大いにありますね」

さまざまな動機から「人の役に立ちたい」を考えるシニアたちが増えれば、なおさら可能性は広がる。「第二の人生は社会貢献」。中高年たちがこぞってこう言い始める時代がやってくるのかもしれない。

本誌・首藤由之